幼稚園児のグループリーダー形成に就て (1)

摩瀬靖正

〔目　次〕

序　論
第一、幼児の心理的特徴
第二、幼児教育指導上の方法
第三、幼児の社会行動的活動の様式
第四、グループリーダーの定義
第五、リーダーの型
第六、一般的リーダーの特質
第七、幼稚園児のリーダーの特質
第八、幼稚園児のリーダーたるべき資格を有しておる性質
第九、幼稚園児のリーダーとしての必然的に備われなくてはならない要素
結　論

（京都市内幼稚園児に施せしグループリーダー形成に就ての実体調査は別紙に記入することにした）

時代の変遷にともない幼児教育が如何に重要性をおびてきたかという事は、我々幼児教育にたずさわる者は勿論、一般社会人の間にも常に論ぜられる様になつて来たのである。

〃三つ子の魂百まで〃とか〃雀百まで踊りを忘れず〃とかいう諺が意味する如く、幼児の社会的生活活動が人生えの基盤ともなるのであり、又社会性の発達段階に於ての最も重要な時期であると共に、人格形成の初段階ともいうべき位置に存在するのである。

人間は本来社会的動物である。社会的存在なのである。従つて単なる孤立的な個人は考えられないのであり、即ち個人も結局社会的個人なのである。幼児の世界にあつても幼児教育機関即ち幼稚園、或は保育園等である。集団生活を通して、協同、社会連帯、相互依存の社会生活に必要なる精神、態度の基礎を日常生活の中に楽しみつゝ体得して行くのである。幼児は常に興味と要求とに応じて、自発的に愉快に活動するのであり、故に我々教育に当る者は斯様な幼児の活動を誘い、促し助け、その成長発達に適した環境を創造する事に努力しなければならないのである。それには先づ、本論幼稚園児のグループリーダー形成の面に就て述べる前に、一般的幼児心理の特徴をよく理解し体得せねばならないのではなかろうか。一般的幼児心理の特徴をよく理解し体得したうえで、それに即した方法で教育の目標を達成していくことが必要で、幼児を取

り囲む直接の環境に順応せしめることが幼児教育の使命であるということを念頭に入れて論述して行くことにしよう。そこで第一に一般的幼児心理の特徴とは如何なるものであるか。一般的に幼児の心理とは如何なるものであるかを箇条的に掲げてみることにする。

〔第一〕 幼児の心理的特徴

(イ)原始的な感情を有しておるのである。
(ロ)注意力が永続しないのである。
(ハ)用語範囲が狭少である。
(ニ)経験範囲が狭少である。
(ホ)利己的であり、主我的である、尚自我中心的である。

右の如き分野が一般的幼児の心理的特徴といえるのであり、その心理のもとに行動発達して行く幼児を眺めるにつけても、次におこるべき問題として幼児教育指導を行うに就て如何なる方法をこうじなければならないかという点が生まれてくるのは当然なのであるがそれでは如何なる教育指導上の方法が必要であるかを次に論ずることにする。第一の如く個条的に列挙しよう。

〔第二〕 幼児教育指導上の方法

(イ)無意識印象を深からしめなければならないのである。
(ロ)具体的道徳的標準を示さなければならないのである。
(ハ)服従、親愛の精神を涵養せしめなければならないのである。

右の如く幼児教育指導上の方法が考えられるのであり、幼児は常に感覚の世界に生き、リズム的活動を要し模倣の時期などであるが故に、斯様な面を常にキャッチしつゝ教育していかねばならないのである。

幼児の生活をみるにつけても、種々の変化活動の中に日進月歩成長発達して行くのである。幼児は毎日の遊びそのものが生活であり学習なのであり、それを通して未知の人生へと発達育成されつゝ行くのであるが、その中に於て、日常観察するにつけても、種々の観点より取り挙げる問題が多く横たわっておるのである。今此処に於ては、その研究の一端として幼児の自由遊びの中に形成されるグループリーダーに就ての点のみを探求して行くことにする。

M.Parten and S M.Newhallがアメリカミネソタ大学附属Preschoolに於て短時間抽出法による幼児の社会行動的活動の様式なるものの研究結果を述べておるがその様式を参考として左に列挙することによって、本論題の内容を明らかにしていきたいと思うのである。

M.Parten and SM Newhall : Sodial behavior of Preschool children in the child behavior and developmented by Barkes,Kounin and Wrightの中に次の様式を述べておるのである。

〔第三〕 幼児の社会行動的活動の様式

(イ)何もしていない行動 (Unoccupied Behavior)
(ロ)独り遊び (Solitary Play)
(ハ)傍観者的行動 (On Looker Behavior)
(ニ)平行的遊び (Paraelel Behavior)
(ホ)低い連合的遊び (A low Type of associative Play)
(ヘ)高い協同的遊び (A high Type of associative Play)

右の如き社会行動的活動の様式を掲げておるのであるが、今此処に問題として取り挙げる必要性をもつておるものは低い連合的遊びと

高い協同的遊びの二種なのである。何故なればこの二種はグループを形成するものであり後者は一応幼児間にもルールなるものが実認されておるのである。私は文頭に掲げたる如く幼児のグループリーダー形成を論じていくのが目的なるが故に、特に二種の様式より生れ出ずるグループの形成にともない、追つてリーダーなる者の諸点を明らかにして行きたいのである。

扨、此処にグループリーダー形成に就て種々の面を論述する前に、グループを形成するその中のリーダーとは如何なる意をいうのであるかという、要するにリーダーの定義より論じていきたく思うのである。

〔第四〕 グループリーダーの定義

〃リーダーとはグループそれ自身の行動の方向や様式を現実に規定し、他の成員に対して決定的な力を及ぼすところの成員をいうのである。〃 従つてリーダーは、心理学的集団と社会学的集団との一致する集団に於てのみ発生するのである。尚此処で心理学的集団と社会学的集団の意を解しておく事にする。即ち心理学的集団とは、或るグループを第三者として客観的に眺める立場。例えばグループを自己以外のものとして眺める場合であり、これ即ち心理学的集団というのであり、社会学的集団とは、グループの中に自己が包含され、他の人が自己の行動的環境の中にあるものとして、眺める立場を意味するのである。此等二種の関係が一致するグループに於てのみリーダーが発生するのである。

次にリーダーの型は幾種類あるかに就て述べることにする。

〔第五〕 リーダーの型

(イ)人徳的リーダー……自然的なリーダーをいうのである。

(ロ)暴力的リーダー……権力的或は破壊的なものを意味するのである。

人徳的リーダーは自由遊びに於て自然的に形成されるグループ内にて自然発生の社会的態度を助長するにあるのであり、暴力的リーダーとは、一般に子供の世界にあつては、普通ガキ大将とかお山の大将とか腕白小僧とかいう類に属し要するに破壊的態度に出るリーダーを意味するのであり、真のリーダーとしては成立せず寧ろ暴力的に出るのであり、自然発生のグループをも流散してしまう危険性を多分に有しておるのである。そこで今、此処に論ずるグループリーダーは人徳的なるものみを考察究明し、リーダーの諸面を明らかにして行くことにする。そこで、一般的リーダーと幼稚園児の形成するリーダーとの相違点等を論じてみよう。

〔第六〕 一般的リーダーの特質

如何なる小さなグループ、大小を問わず質が等しいものは一つも存在しないのであり、そこには指導的立場を持つたものとしての場と、導かれる者としての場との二様が成立するのであるが、此処に一般的リーダーの特質といおうか、特徴としては次の様な意を有しておるのである。即ち、グループの性質、目標、集団員の年令、性、人種、性格等の諸点によつて異なるのである。

〔第七〕 幼稚園児のリーダーの特質

幼稚園児の社会的行動をみても、幼児の日課は社会性の発達の中に、遊びそのものが生活なのであるが、そこに於て形成されるグループリーダー勿論此処では人徳的リーダーを

いうのであるが、そのリーダーの特質は次の様な点が挙げられるであろう。リーダーは主導性をとる者であるのはいうまでもなく、一般に幼稚園児は、身長、知能、遊戯に対する暗示的な力のある者がなり易いのであり、性別の差は主要ではない（京都市内幼稚園児の形成するグループリーダーに就ての実態調査に依る）国籍、親の社会的位置、容貌の美等は主要ではないのである。これに反してグループに対する公平、責任感等は比較的に重要性を持つておるのである。尙幼稚園児にありては、外的条件が有力であるが、年令の進むにつれて道徳的条件が重視される様になつて来るのである。幼稚園児の自由遊びの中でリーダーになつておる幼児は如何なる現象を表わしておるかといえば、例えば砂場にあつては、我儘、勝手の行動をコントロールしたり消極的な子供を勇気づけたり又彼等の協同行動を興味づけたりするのである。ブランコの場合に於ても、順番をきめてやつたり、数えてやつたりする。尙雑談の中に入つて彼等の知的活動をさえ促進してやる事が出来るのである。

斯様なる点に於て、一般的リーダーの特質と幼稚園児のリーダーの特質との相違点が見出されるのである。それでは斯様な幼稚園児のグループリーダーの特質よりして、次に如何なる性質の持主がリーダー格として選出されるかを、京都市内幼稚園児のグループリーダー形成に就ての実体調査の結果を発表する事にする。

〔第八〕幼稚園児のリーダーたるべき資格を有しておる性質

実体調査の裏付けとして得られたる研究結果を次に箇条的に掲げる事にする。尙実体調査は別紙参照される様。

(イ)グループの遊びに於て、自己を打込んで然も自信を持つて、統一力を有しつゝ誘導して行く力があるのである。

(ロ)明朗快活にして、然も決断力を有し、全体を把握して希望する目標に向つて誘導して行く力を有しておるのである。

(ハ)グループ内の各個人の特徴を摑んでおるのである。

(ニ)グループの遊びに於て、世話好きにして親切心があり、然も落着きの中に他の幼児にうまく合う様に誘導して行く人力を有しておるのである。

(ホ)グループ内で創造力を有して新しい方向をも創り出して行く力を持つておるのである。

(ヘ)グループ内で積極的に行動し、素直な気分の中に、社交性を持つて指導して行く力を有しておるのである。

以上右の如き箇条的なるものが必然的に備われなくてはならぬリーダーとしての共通面を研究結果発表したのであるが、それでは次に論を進めて、リーダーとして必然的に有していなければならぬ要素とでもいおうか条件的なるものを左に箇条的に論述する事にする。

左の研究結果は、京都市内幼稚園児の実体調査に依るものである。

〔第九〕幼稚園児のリーダーとして必然的に備われなくてはならぬ要素

(イ)智的なる面、知的なる面を見ると先づ知能は発達的に見てもその持主は、標準以上の上位を占め優秀なる者がリーダーになつておるのであり、知能の優れない者は人徳的リーダーとしての資格は有せないのである。

(ロ)向性（Personality を含む）向性の面とは即ち幼児を外的条件のみに止まらずして一

応内的条件をも必然性を増して来ておるのは当然であり、そこで向性、換言すれば、性格の面をも研究してみたのである。向性を研究するに就て向性検査を試み、別紙の要領で京都市内園児二八〇〇名に行い、如何なる向性の持主がリーダーになつておるかを研究したのであるが（三歳二カ月～六歳十カ月）その結果からしてみると、外向性の幼児が全般的にリーダーになることが解つたのである。内向性の幼児はリーダー格としては認められないのである。尙此処で問題となるのは、今まで幼児に対して向性検査は困難ではないかという論が出ておつたのであるが、私は此処に論題に関する範囲内にて行なつたのであるが一応成功の途を見出したのである。尙此処では向性検査に就ての詳論は略すことにする。

(イ)健康状態、幼児の健康状態の面から考察してみるに、やはり、リーダーになる幼児は不健康即ち弱身型の者では認められず、健康的で丈夫な幼児、何時も元気にて活潑な伸びくとして育つておる幼児にリーダーとしての要素が含まれておるのである。

(ニ)情意的な面、此の面に於ては、他を抱擁する雅量と落着きのある者がリーダーとなつておるのである。

以上右に述べたる如く、リーダーたるべき幼児の必然的に備われなくてはならぬ要素として四箇条挙げられるのである。知的な面として知能検査に依つて調査し、向性的な面として向性検査を使用し、それに附して健康状態、或は情意的な面に及ぶ調査を行つたのであるが、右の箇条がやはり、リーダーとしては必然的に備われなくてはならぬ要素として見出すことが出来得たのである。

此の要素はリーダーを通して備われておるのであり、此の中一箇条でも欠けたればそれは真の人徳的リーダーとしては、望めないのであり、此の四箇条の備われる幼児に於てのみリーダーとしての要素なるものが強調され得るのである。私は此の四点をリーダー格としての条件として、四要素と呼ぶことにする。

結　論

以上既述の如くグループリーダー形成に就て種々の面を考察して来たのであるが、要するに幼児の世界に於ては、社会的場面は、必ず自分はその人と比べて如何なる地位にあるのかという自我水準を、その時その時自ら決定し予期しておるのである。自分はこの人より力があるとか、自分はこの人より偉いとか他人との比較対象に於て、自我水準を定めて行動するものである。然し此の自我水準はその時の相手によつて高くなり或は低くなつたりして、一定しないのであるが、何時も割合に自我水準を高くとり易い傾向を持つ幼児と何時も自我水準を低く持つ幼児とがあるのである。それが所謂性格の相違になり、でしやばる幼児は自我水準を高くとり易く、自我水準を高くとり易い幼児は結局リーダー格になり易いのである。そのリーダーはその時の構成員の状態によつて、相対的に決定され、その時自我水準の比較的高い者がリーダーになるのである。然らば何時も同じ幼児が如何なる場合に於てもリーダーになるのであるかという問題が生じて来るのは当然なのであるが一般的にある面でリーダーになるからといつてそれが他の面でリーダーになるとは限らないのである。それは何故か、それは自我水準はその時、その場面、構成メンバーの質によつて変化するからである。然るに、どうしても

リーダーになり易い幼児がおる事は事実で、自我水準を高くとり易いものがある。

然しでしやばるといつても幼児のでしやばりは幾種類もあるのである。例えばおせつかいのでしやばり、我儘なでしやばり、侵攻的でしやばり等、おせつかいのでしやばりは、内向的なる幼児の世話をすることも出来、先生等に種々命令されなくても自分から進んで例えば色紙配らして頂戴とか先生の代りにしてあげようとかいつて行動欲求を表わすのであり、此の類はリーダーとして真の意を発揮せしめることが出来るのである。次の我儘とか侵攻的なでしやばりは、真のリーダーとしては認め得ることは困難であつて、侵攻的でしやばりは、ガキ大将とかお山の大将とかいう暴力的リーダーになる危険性を多分に含んでおるのである。

グループを形成する幼児にリーダーシップなるものを包含させつゝよきグループとして人徳的にスムースに誘導せねばならないのである。

右の如く幼児の世界にありても一種の観点即ち〃幼稚園児のグループリーダー形成に就て〃の面を眺めるにやはり右の様な観察より研究が横たわつておることを思う時　我々は未だ〳〵幼児の世界にありては研究されるべき余地がある事は当然の意として努力せねばならないのである。私は此の論題に就て九項を挙げて研究したのであるが、考察の範囲を変えれば未だ〳〵蓄積された資料が横たわつておることと思うが、此処に選出した項目に依つて幼稚園児のグループリーダー形成の面が略々明らかにされたことと信ずるものである。

最後に斯様な幼児の多面的な活動に対して我々集団生活の中にある幼児を指導して行かなければならぬ者としての必然的に備われなくてはならぬ資格としては、先づ身体が強健でなくてはならないのであり、言語明晰にして挙動が明朗闊達である事が必要なのである。

尚それと関連して教育者の身なりも軽快であつて、明るい感じを幼児に与えるものでなければいけないのである。要するに幼児を指導する教育者の態度としては、幼児のことを常に心配する慈愛の心と幼児を敬服させるだけの技倆とが、強健な身体と明朗闊達な言動とによつて、遺憾なく発揮されなくてはいけないのである。

以上の如く幼児教育の重要性を見るにつけ此処にその一分野の一点として研究を取り挙げるに至つた幼稚園児のグループリーダー形成に就ての発表を終ることにする。

幼児は常に伸育されて行く。我々はその美しき赤裸々な姿である幼児を正しく、明るく真の愛情を持つて、常に我々自身、反省と自覚の中に育て上げて行かねばならないのである。

（筆者、京都市西山幼稚園長）